

第5回 車座・交流会 in 気仙沼市 & 気仙沼大島

第5回車座・交流会で訪れたのは気仙沼市と気仙沼大島。震災から約2年が経過し、本市の産業を支える魚市場も稼働を再開し、カツオやサンマの水揚げで活気を取り戻しつつある。内湾エリアは気仙沼観光のシンボルスポット。震災で大きな被害を受けたが、仮設店舗の復興屋台村「気仙沼横丁」や復興商店街「南町紫市場」など、市内8箇所でオープンし、復興に向け歩み始めている。一方、気仙沼大島は、津波で太平洋側から、さらに、引き波で本土側から呑み込まれ、二度もの津波被害を受けた。この震災により、港および町の中心部が壊滅的被害を受け、多くの民宿や観光施設、船舶などの生産手段を喪失した。2013年の3月には、更なる復興への足がかりとして、復興祈念大会「河北新報気仙沼つばきマラソン大会」が、約3年ぶりに開催された。

【日 時】 2013年4月12日～13日

【場 所】 宮城県気仙沼市・気仙沼大島

【参加者】 気仙沼市・気仙沼大島を中心に復興に取り組む現地リーダー 40人、首都圏からの参加者・専門家 24人

【初 日】

10時半	一ノ関駅集合
12時～	復興屋台村 気仙沼横丁にて合流、昼食
13時半～	NPO 法人ネットワークオレンジ (気仙沼市リーダーの小野寺美厚氏、村上緑氏、米倉三喜子氏のお話を聞く)
15時～	鹿折地区の視察
	気仙沼市魚市場の視察
17時～	大島にフェリーで移動 ・椿花びら染め体験会 ・被災地のリーダーからの報告・意見交換会

首都圏を中心に各地からの参加者が一関駅に集まったのは午前10時半、そこから気仙沼までバス移動し、正午に「復興屋台村 気仙沼横丁」に到着した。この復興屋台村は、津波によって被害を受けた気仙沼に「飲食店の賑わい」を取り戻すため、復興のシンボルとして2011年11月気仙沼市南町にオープンしたもの。地元の食材がメインの飲食店、海産物や土産品を扱う販売店など、19店が立ち並ぶ。プレハブ建屋の前の看板が賑やかな飲食店街を見学したのち、少人数のチームに分かれて昼食を取りながらの交流となった。

午後は、気仙沼市内のNPO 法人ネットワークオレンジの事務所で、代表の小野寺さんの話を聞く。障害を持った双子の息子さんを育てるに

も行政の支援制度がなく、自らフリーマーケットで資金作りをして団体を設立し、グループホームや働く場づくりを行ってきた。そうした中で発生した東日本大震災を機に、地域のために自分達にできることは何かを問い、甚大な被害を受けた三陸沿岸の起業家の人たちによる復興市「東北マルシェ」を主催するようになった。ハンディキャップを乗り越え、さらに地域のために貢献していくこうとする姿に、皆が感銘を受けた。続いて、東北マルシェで起業した人たちの話も聞く。パワーストーンのアクセサリの販売や製作講習会を通して、気仙沼の人を笑顔にしたいという村上さん。被災地において、フットサロンを経営しながら療法士を増や



して行きたいという米倉さん。お一人お一人が、「東北マルシェ」を足がかりに、自身の仕事を復興させようとしている。



三陸新報記者の三浦さんの案内で、気仙沼市内を視察。なかでも、震災時に湾岸の油タンクや船舶の燃料が市街地に流れ込み引火。大規模火災が発生し莫大な被害を受けた鹿折地区では、東日本大震災の津波の恐ろしさを物語るシンボルとしてよく知られている大型漁船（気仙沼港から内陸へ800メートル。津波によって流されてきた330トン）の姿を間近に見る。現在、このような震災遺構について解体すべきか保全すべきか、地域内で合意が取れない現状があるとのこと。沿岸は地盤沈下しており盛り土が必要だが、国の縦割行政によってそうした施策もうまく進んでいない。一方で、湾岸に防潮堤を建設する計画を国が早急に進めようとしているが、風光明媚な場所での景観の保全を考慮すると、もっと時間をかけて議論をした方が良いのではないかと感じた。



市内視察を終えた後、フェリーで、「緑の真珠」とうたわれる周囲24kmの美しい島、大島へ移動し、その日の宿に向かった。「休暇村 気仙沼大島」に到着すると、事前に申し込んであった希望者20名は「大島椿花びら染め」の体験会に参加。絹の生地を染め、美しいピンク色に仕上がった。



その後、夕食会で、大島からの参加者が合流。被災地で活動するリーダーの方々から、様々な取り組みを聞く。「手芸作品の販売や体験教室を通じたコミュニティ活性化（白幡まさえさん）」、「大島に咲く椿の花びら染めを広める（小山律子さん・福田まさ江さん）」、「震災復興地域発の酒ブランドで、日本における寄付文化の醸成と消費行動の変革を目指す（山田好恵さん）」、「石巻近郊の里山を拠点に、子どもたちの居場所づくり、コミュニティづくりを目指す（太田美智子さん・高橋信行さん）」、「被災者同士の断絶といった問題と地域の再生への取り組み（吉田恵美子さん）」、「防潮林づくりを通して地域の復興を図る（松島宏佑さん）」、「福島の実地の声を全国で語り続ける（高村美春さん）」、「三陸沿岸地域に自生する気仙椿のブランド化を目指す（佐藤武志さん）」、「被災者の心のケアに、カウンセリングやセラピーで対応する（溝口あゆかさん）」、「英国と被災地をつなぐネットワークづくり（斉藤彩子さん）」といった個性的で魅力ある取り組みに、参加者は皆大きく感銘し、チャレンジする人たちの熱い思いに刺激を受けた。



夕食会のあとの交流会では、参加者がそれぞれ自由にお互いの取り組みについて語り合い、新たなつながりが生まれたようだ。

【二日目 午前】

7時～	田中浜 朝の散歩会 セラピー体験会 朝食
11時～	NPO 法人ネットワークオレンジ ・気仙沼市長 菅原茂様からのお話 ・昼食 ・車座ワークショップ
17時～	道の駅「かわさき」にて買い物
18時	一ノ関駅解散

翌朝は7時から、朝食前の散歩会が開催された。休暇村の平野さんの案内で、宿の後ろの20メートルほどの高さはあろうかと思われる崖を階段で下り、田中浜へ向かう。津波は、この崖の半分位の高さまで上がってきたらしい。田中浜は広々して穏やかな美しい浜辺だが、震災による地盤沈下で80センチほど低くなっているとのこと。その後、浜から5分位の所にある、



死者を極楽浄土へ導くという「みちびき地蔵」を訪れる。今回の大震災後で被災したが、多くの方々のご尽力で再建されたようだ。

同時に7時から8時までは、被災地で大きな問題となっている心のストレス問題について、15名ほど集まり、溝口あゆかさんのセラピー法についてのミニレクチャーを受けた。実際に、福島のいわき市で活動している吉田恵美子さんのケアを実証実験してもらった。わずか20分間ほどで効果があったことに、参加者も驚いた。

朝食を終えた後、あらためて島の観光名所の散策に。大島の最高所である亀山の展望台にのぼる。ここからは、海を隔てて気仙沼市内をはじめ、三陸海岸の景色が良く見えるが、町も山の緑も、津波によってどれほど大きな被害を受けたのか一見して把握できた。その後、フェリーで気仙沼に向かう。



【午後：車座・交流会】

一日目と同じNPO 法人ネットワークオレンジの事務所にて、気仙沼市長である菅原茂氏にお話を伺った。気仙沼市としての最大の・不安は、少子化により人口が減っていることであり、東京に出た人や働ける年代の人を気仙沼に戻す様、魅力ある町づくりや、仕事の機会をつくっていく必要があるとの考えをお話いただいた。また、ITが発達して、田舎と都会の垣根が小さくなっているのも、この点を生かして行くことが、日本の将来の国づくりにも重要であるとのビジョンを語られ、市長のリーダーシップが感じられた。



交流会では、前夜の活動報告で明らかになった、東北が抱える課題や展開中のプロジェクトについて、6つのテーマでディスカッションを行った。テーマごとに数人ずつのグループに分かれ、首都圏のリーダーの一人がファシリテーター、東北のリーダーがキーパーソンとなり、各テーブルで、課題ビジョン、アクションプランをまとめる。より多くの知見・アイデアが活かされるよう、前半・後半でメンバーを交代。熱く活発な議論が行われた。

- テーマⅠ 気仙沼の活性化・ブランド化
- テーマⅡ 東北マルシェ ～コミュニティビジネスの育成の場～
- テーマⅢ 気仙沼椿ドリーム ～気仙沼椿のブランド化～
- テーマⅣ メンタルケア・セラピー ～みんながみんなのセラピスト～
- テーマⅤ やってみっぺ☆夢プロジェクト～カフェとコミュニティづくり～
- テーマⅥ 福島 ～これからの福島～



ワークショップ後は各グループの議論を共有。被災地支援が縮小しつつある今、支援に頼らずに事業や活動を進めてゆくには、「自立」がキーワードとなる。東北から新しい社会をつくっていくための多くのアイデア・意見が挙げられ、目指すべき未来への希望が感じられた。

- 一次産業、過疎化、被災地、高齢者、障害者、これらに対して解決していく
- みんなのオアシスとなる場を創造、提供し、コミュニティの活性化をめざす
- 「東北マルシェ」を気仙沼のコミュニティビジネスだけでなく、東北発の全国にむけたソーシャルビジネスの登竜門とする
- 震災2年目を迎え、東北エリアでは「心の病」が大きな問題となっている
- カウンセラー、セラピスト、ケア関係者の連携、ネットワーク作りが必要
- 子どもが夢を持てる、選択できる社会づくり
- 子どもたちの意見を発信する
- いわき市のオーガニックコットンタオル、気仙沼のオイル、気仙沼鮫皮のジーンズ等、異なる地域間で連携しながら商品をパッケージ化して販売する
- 鮫が人々に与える冷酷さ、ハードな印象を活かした鮫素材のオリジナル商品化
- 鮫素材の事業化を手始めとして、気仙沼を活気付けるひとつのロールモデルとしたい



2日間の車座・交流会での出会いに感謝し、また復興に向けて自分に何ができるのかを考えながら、それぞれの想いを胸に、2日間にわたる全てのプログラムが終了した。